

### 第三講 表象化される記憶と文化史・歴史

レポート講評：人は何故過去を記憶し、記録しようとするのか

記憶、記録の原因：死、忘却への不安、恐れ、自分の生きてきた証を残したいという願望

人は二度死ぬ、一度目は物理的な死で、二度目は忘れ去られることによって

思い出されることで死者は生き返る（『青い鳥』の祖父母）

何故残そうとするのか：失敗から教訓を得るため

参考になる

未来の人たちへのメッセージ、役に立つ

過去からの連続＝記憶の継承、自らのルーツを探る（アレックス・ヘイリーの『ルーツ』（1977年 TV ドラマ化）・ガンビアのマンディンカ族出身の若者クンタ・キンテに始まる親子三代にわたる黒人奴隷の物語）

自らの正当性を主張する為、英雄化したいという願望

過去の経験から現在の出来事に対する不安を取り除こうとする

記録の効用：口伝より記録の方が伝達媒体としては確実

言葉による情報・記憶の伝達と共有の重要性・・・ホモ・サピエンス行動の効率化

個人の記憶だけでなく、芸術や文化を残す

記憶の問題点：捏造、改竄、創作、改変のし易さ

新しい価値観の挿入・・・過去は過去のまま記録・継承されない

記憶の場としてのモニュメント（記念碑）

円山公園の「新聞少年の像」・「ラジオ塔」・「坂本竜馬と中岡慎太郎像」

金沢城公園の巨大な「ヤマトタケルの像」・・・西南戦争の戦没者を祀る。明治13（1880）年建立。

花の御所を示す石碑（今出川室町北東角）：従是東北 足利將軍室町第址  
モニュメント

表象化する記憶

昭和という時代を象徴：経済恐慌・戦時体制・戦後復興と

民主化・所得倍増・三種の神器（テレビ・電気洗濯機・電気冷蔵庫）

貧困と苦学・立身出世・近代化・国民動員・革新性への願望

記憶の統合機能＝共同体への帰属意識の形成

共有される記憶は同じ価値観を共有する集団を形成し、人々を統合する

(ファンクラブ・野球場・同窓会など)

民族という集団に共有される「集合的記憶」

P・ノラ (1931年～)

ピエール・ノラ編 (谷川稔監訳) 『記憶の場』

(岩波書店：2002-03年)

移民の流入によるフランス人の文化的アイデンティティ喪失の危機

フランス国民の「集合的記憶」

ウェルキンゲトリクス・フリジア帽など

多民族・多文化社会 (移民社会) への批判

グローバル化への批判

記憶による他者の創出

共有化されない記憶の存在

植民地の記憶と宗主国の記憶の位相差

同一空間に生じる異次元世界の共存

記憶と記憶の相克

記憶の背景に横たわる歴史・社会・文化の相違

記憶の統合・異質性の承認

会津の幕末戊辰戦争の記憶

明治政府の「正統史観」との相克

アテナイ帝国の記憶

トゥキユディデスとイソクラテス

記憶と文化史 (歴史) の関係

国民的アイデンティティへの統合を目指す

ブルカ禁止

単なる記録・記憶は文化史 (歴史) になるのか？

・Historizein(探求する)→History (歴史)

何故、ペルシア戦争が起きたのか。

直接的にはイオニアの反乱にアテナイとエレクトリアが援軍を派遣したこと。

原因を探求。「何故」という好奇心。  
ソフォクレスの『オイディプス王』と共通  
イオニア哲学の産物（神話を批判）

記憶における自己正当化

不都合な記憶の忘却・修正

都合の良い記憶の創作・反復・拡散

自我の防衛本能

心的ストレスの回避

文化史（歴史）における価値中立性の原則

権威・権力からの距離

記憶と文化史（歴史）の相克

記憶の反歴史主義